The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

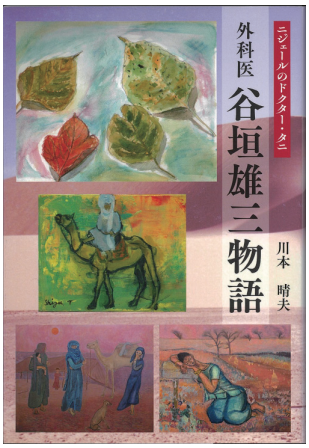
Title	書を抱えてフィールドに出よう！
Author(s)	安田, 直史; 小笠原, 理恵
Citation	目で見るWHO. 2023, 84, p. 32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書を抱えてフィールドに出よう!



ニジェールのドクター・タニ　外科医 谷垣雄三物語

著　者：川本晴夫
出版社：国際開発ジャーナル社　2022年 5月発行

「保健医療分野の国際協力というのはどうあるべきなのだろうか？」この書を読んで再度この正解のない問いに思いを巡らせました。

谷垣雄三医師はアフリカの最貧国ニジェールで外科医として、まさに一生を捧げる形で貢献されました。「医師として患者を診る」ことを追求し、妥協を許さず理想を追う姿には感動、尊敬と同時にあこがれを感じます。現地に溶け込み、現場から政府に提言しつつ「実践ガイド」を作成し実証するというすばらしい行動力です。その過程で WHO をはじめとする国際援助プロジェクトと、地に足がついた適正技術を浸透させることを目指す彼のアプローチとの間には軋轢が生じます。これこそ「どうあるべきなのだろうか？」を考えるうえでの対立項ではないでしょうか。彼の哲学は「ニジェールだからといっていい加減なことをしないでね」と言った妻の静子さんの言葉に代弁されていると感じました。今の「グローバルヘルス」に関わる私たち、そして関わろうとする若い人たちに「あなたの哲学は？」と問いかけられている様に感じます。幼馴染、大学の山岳部 OB らが彼の活動を支え続け、この書を書くに至ったのはまさにその哲学と人格と情熱が人々を動かしたのだと感じます。

折しも 2021 年には WHO 西太平洋地域では「安全で安価な外科のための行動フレームワーク」が出版され、UHC において外科へのアクセスにも注目されつつあります。谷垣氏の存在を知り、彼の問いかけを受け取るために国際保健医療分野での貢献を志す若い方にぜひ手に取ってもらいたい一冊です。

（紹介者：安田直史）

プラネタリーヘルス 私たちと地球の未来のために

著　者：長崎大学(監訳)・河野　茂(総監修)
出版社：丸善出版　2022年3月発行

米国で2020年に出版された『Planetary Health: Protecting Nature to Protect Ourselves』の日本語版。監訳の長崎大学は、2020 年に全学総出でプラネタリーヘルス学環を立ち上げるなど、日本におけるプラネタリーヘルス研究の先駆的存在です。

プラネタリーヘルスは、ほんの数千年の人間社会の活動によって起こった環境変化（地質学でいう「人新世」）が、地球および生物全体に及ぼす影響を計測して可視化し、その反省とともに将来に向けた持続可能な解決策を生み出すことを目指す分野です。本書は、気候変動、生物多様性の損失、汚染、食料と栄養、エネルギー問題、感染症など環境に直結したテーマから、人口と消費、紛争・移住、非感染症などまでを網羅した、世界初のプラネタリーヘルスの教科書と言えます。「プラネタリーヘルスの歴史の語り部たちが、現時点では先進国出身の善良な白人男性の専門家ばかり」であり、そんな彼らが「…植民地主義と無配慮な経済成長への内部からの批判」と「国内総生産（GDP）を経済的健康の妥当な評価基準だと見ることへの批判」の「代弁」を示唆する箇所（p.32-33）にはハッとさせられます。人間の健康を地球の健康に重ねて考えるとき、議論になるのは二律背反（trade-off）の関係性です。人間の健康に良いものが地球の健康にも良いとは限りません。抗生物質などはその典型例と言えます。Whitmee ら（2015）は、「（人類が得た）利益（benefit）は目先のものであり、（人類は）その代償を極めて長きにわたって支払わねばならない」と指摘しています。

はたして人類は、自然界との新たな関係への「大転換（Great Transition）」を果たすことができるのか？この問いを胸に、読み進めてほしい一冊です。

（紹介者：小笠原理恵）